

第7分科会

学生間の協同的学習を促す授業方法

報告者

西園 貞子 (大阪医科大学 看護学部 講師)

山田 和人 (同志社大学 PBL 推進支援センター長 文学部 教授)

古庄 高 (神戸女学院大学 文学部 教授)

コーディネーター

西村 美紀 (大谷大学短期大学部 講師)

学生の学力低下や高等教育全入時代の到来によって、「主体的学び」を授業者が仕掛けていくことが求められるようになった。とくに FD 義務化以降、FD の授業改善分野において、教員—学生間の双方向的授業方法や ICT を利用した授業方法など、多様な授業方法が開発されてきた。本分科会では、その中でも、学生間の協同に基づいた授業実践を紹介し、学習される内容や質はもとより、学習そのものへの姿勢や態度の変化についても議論したい。このような学習におけるパラダイム転換は、これまでも学校教育の授業方法としてその理論や実践が蓄積されてきたが、今回は学校教育との連続性、また大学教育における展開や組み替えといった点にも注目し、協同教育の授業方法で、講義科目での授業実践、演習科目での学習法 (LTD 学習法) や IBL 学習法などの報告、ワークショップ等を通して、考えてみたいと考えている。

＜第7分科会＞

学生間の協同的学習を促す授業方法

参加人数	37名
報告者	
第1報告者	西蘭 貞子（大阪医科大学 看護学部 講師）
第2報告者	山田 和人（同志社大学 PBL 推進支援センター長 文学部 教授）
第3報告者	古庄 高（神戸女学院大学 文学部 教授）
コーディネーター	西村 美紀（大谷大学短期大学部 講師）

○ 分科会のねらい

第1日目のシンポジウム①では、「主体的な学びを支える仕組み」について、学生の主体的学びを引き出す仕組みが社会的要請となってきたこと、そのためには、単なる「活動主義」を超えた「能動的な学習活動」や「主体的学び」を育てるという視点や物理的な学習環境の構成やカリキュラム全体の構成などの総合的な視野が必要であることが論じられていた。

学力低下や高等教育全入時代の到来によって、何を学習したいのかが明確になっていない学生やリテラシー不足によって学習そのものへの自信がない学生を、多く受け入れている。そのような状況を受け、授業改善への工夫がFDの義務化等の過程で活発に展開されている。学校教育の教育方法や教授技術が導入されたり、ICTを利用した教授方法の開発も活発である。

また、学生の人間関係構築力やコミュニケーション能力の低下も問題となっており、それによって、議論の中で自らの学びを深めていくような学習が難しくなっている。このような学習は専門分野の学習や研究には不可欠であり、大学教育において培うことが求められる力でもあるだろう。

そこで、本分科会では、＜学生間の協同的学習＞という教育方法を採用している3名の先生方にその方法や事例を紹介いただき、それが「主体的な学び」となるにはどのような工夫が求められるのか、そもそも「主体的な学び」とは何なのか、について考えていくことを大きなねらいとした。それだけではなく、そのような考察内容と、それ

ぞれの実践の場面で使えるような方法や指導上の留意点を関連づけ、より具体的な方法へと展開したいとも考えた。

○ 報告の概要

1. 「主体性を育む学習方法」（西蘭貞子）

看護師養成課程において一般的に行われている Problem-Based Learning から発展した、Inquiry-Based Learning（以下、IBL）チュートリアル事例について発表された。Problem-Based Learning と IBL はともに、グループ討議による学習方法であるが、Problem-Based Learning は、事例における問題状況への対応を討議したり、持ち帰り、自学したりする中で、＜問題解決能力＞を養うことを目的としている。それにたいして、IBL は事例の文脈（一見、治療には関係なさそうな登場人物の生活背景など）をもグループ討議の中で予想し、＜問題発見能力＞を養うことを目的としている。西蘭氏が強調されていたのは、この予想する際の幅の広さをいかにもてるか、であった。まずは、事例中の患者の状況理解のために、無関係かもしれないが可能性がゼロではない予想を出し合うことからはじめ、そこから徐々に個人学習やグループ討議を経て、文脈に沿った問題状況を把握していくというプロセスこそが、看護実践においては重要である。そのために、事例の中で教師が提示するのは、非常に限られた情報であるとともに、さまざまな可能性を含み得るような情報である。

事例のストーリーが進む間に何度も短い議論

—テーマごとに時間をかなり細かく区切って行う(一つの作業に2分/7分など) ことで、話し合いの間に集中力が途切れないという—を行い、一部の学生ではなく、全員の意見を聞くように進められる。

また西藺氏は、学習効果や態度について、SIDRAS という指標を使いながら分析した結果も紹介してくれた。

2. 「PBLとチーム学習～プロジェクト科目の場合～」(山田和人)

同志社大学の全学共通教育科目として行われているプロジェクト科目の事例を紹介し、学生が主体的に学習する環境や枠組みについて議論した。

同志社大学ではPBL(Project-Based Learning)を「一定期間内に一定の目標を実現するために、自律的・主体的に学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、個人あるいはチームで協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び」と定義している。プロジェクトのテーマは事前に地域社会からの公募によって選ばれ、〈講師〉としてプロジェクトの指導担当者となる。学生はどのプロジェクトに参加したいのかを選び、予備登録として申し込みをする。(申し込みにはなぜそのプロジェクトなのかについてのレポートを提出しなければならない。)

それぞれのプロジェクトは、全体のタイムスケジュールに従いながら、自らの計画を立てて、探究を進める。予算についての手続きや管理も学生自身の責任である。発表会のプレッシャーもある。プロジェクト学習には、近年の学生が苦手とするような内容(目標の明確化を求められる、マニュアルがない、社会発信を求められる、リスクやトラブルを含むなど)を含んでおり、彼らにとっては社会との関係の中で、もしかすると初めて直面する〈逆境〉であり、それが主体的な学びにつながっている。

プロジェクトの評価は相互評価で行っており、全プロジェクトの発表をコンテスト方式で行い、競い合う。プロジェクトをしっかりと取り組んでき

ているため、学生の評価能力や視点もしっかりしていることが多い。

プロジェクト学習を単なる「活動」ではなく、〈主体的な学び〉へと充実させるためには、枠組み(全体のスケジュール、人的・物的環境の構造化など)を精緻にしながら、学生同士の相互評価を利用していくことが重要であるとされた。

3. 「協同学習による授業—LTD話し合い学習を中心に—」(古庄高)

この発表では、実際に「協同学習」の体験をさせてもらいながら、体験的に話し合い活動の重要なポイントを理解していった。「協同学習」とは、以下の項目を満たすグループ学習をいう。①互恵的な協力関係が成立している、②学習集団の目標と活動に対する個人の責任が明確である、③生産的相互交流が促進されている、④「協同」の体験的理解が促進されている、の4項目である。グループ学習が陥りやすい人任せ、ただ乗り、不参加、支配といった結果にならないための仕掛けが必要であり、そのような仕掛けや工夫が「日本協同教育学会」においても蓄積されている。

様々な話し合いの技法を体験をしながら、参加者は、協同的な雰囲気かふっと部屋の中に生まれた瞬間を感じることができ、また短い時間に人間関係ができたと感じたようだ。協同学習の技法では、一人がひとつのテーマについて話す時間が、1分、1分半といった短時間に区切られていることが特徴的であった。その時間は話す内容にちょうどよい長さでなければならない。教師の準備の段階での見通し力が求められるだろう。この協同学習の諸技法については、講義ベースの科目であっても採用可能であり、教室内の人間関係を協同的な関係へと変化させるものである。

LTD(Learning Through Discussion) 学習法は、講義科目などにおいて、個人学習である〈予習〉と話し合い活動である〈ミーティング〉を組み合わせた学習法である。協同的な学習グループにおけるミーティングに参加しようと思うと、予

習をしなければならぬ。予習をしっかりしてきて参加したミーティングは、とても充実し、学びのおもしろさを感じることができる・・・という充実した学習経験を積み重ねることによって、主体的な学習者へと育てることが、LTDの可能性であろう。

ここでも、ミーティングは、予習のステージごとに時間を区切りながら進めていく。また、自己評価にてふりかえりをおこない、継続的に行うことによって、自分の成長を実感できるものである。

○ 報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

1. 質疑について

全体討議において、グループ学習における役割分担の仕方、評価方法の2点を中心に話し合いが行われた。

IBLにおいては、話し合いの場面では、司会、書記、記録の3つの役割をもっている。事例のストーリーは、全部で3つのパートでできているため、全部で9つの役割が用意されている。そのため、全員がどこかで何かの役割がまわってくることになる。

PBLにおいては、プロジェクトのチームは、初対面の場合がほとんどである。その中で、リーダー、サブリーダー、会計、などの役割を作る。グループごとにはもちろん、全体のミーティングごとにも役割があるため、兼務の場合も多い。頼り、頼られるような経験が重要であろう。

LTDにおいては、参考文献にもある安永氏もリーダーは決めないというふうになっているが、それにしがっている。グループで協力して進めていくので、固定したリーダーなどの役割を、というよりも、全員が全員の意見を聞きたいという形で話し合いを進める。

評価については、とくに数値化できるのか、という質問であった。

IBLにおいては、IBLの話し合いだけで最終評価とするのは難しい。ミーティングでは自己評価によって自らの学びを意識してもらおう。本当は

形成的評価として記録の内容などから、学びの広がりや深まりを把握し、次の学びへとつなげていけばよいが、看護師養成の場合、最終的に国家試験合格という目標もあるため難しい側面もある。

PBLの場合、自己評価や相互評価がベースであるが、その精度をあげるための工夫が必要である。そのポイントとして、各自のプロジェクトへのコミットメントを強めることがあげられた。ルーブリック評価についても、評価そのものが成長すべきであることを考えると、毎回書き直すくらいのことになるだろう。

協同学習の評価方法は、詳細が載っているのですが、参考文献などを参考にしてもらえればよいが、LTDについては、なかなか相互評価だと日本人の特性か自分よりも低い点数をつけづらいようなので、出席や予習ノート、レポートによっておおまかに評価するようにしている。毎回の自己評価とともに、予習ノートへのコメント記入など細かくフィードバックしており、その両方でふりかえりを行っている。

2. まとめ

3つの報告から、なんとなく学生が動いている能動的な学習活動でありさえすれば、主体的な学習が実現しているとはいえないということが確認できた。グループ活動が「主体的な学習」として展開しているとき、学生は「楽しいけれどしんどい(楽しんどい)」と感じていることだろう。そのような状況をつくるには、やはり教員側の<仕掛け>が必要である。今回の分科会から導き出された<仕掛け>としては、①時間の管理、②プロセスや内容などの枠組み、の2点をきちんと教員が行うことがあげられていた。

①の時間の管理については、どの報告においても、比較的、短時間で小分けにした時間設定の中で活動させていたように思う。また②の内容やプロセスについても、どの程度の自由度を与えるか、それによってどのようなことをねらっているのか、教員自身の授業のねらいによって、何をどの程度提供し、何をどの程度学生の自由裁量

や自律的に行う部分とするのか、見通しをもって決めておくことが重要であるように感じた。①も②も、ともに最初から教員側がうまく見通しをもてるわけではなく、探究、ふりかえりしながら、徐々に上手になるのだろう。

①や②などの仕掛けを上達させるためには、学生理解を深めることと、教育内容や教材への理解を深めることの両面が必要だろう。学生理解を深めるためには、学生へのフィードバック、学生の自己評価、社会的な場面（地域社会にしても、グループ内、より大きな発表の機会など）での学生の言動、などが材料となるだろう。教育内容や教材への理解を深めるためには、もちろん教材研究や研究そのものも必要であるが、学生がそれらにどのように反応するのかという、学生理解との関連づけも求められるだろう。

教員が試行錯誤、ふりかえりを行いながら、＜仕掛け＞をよりよくしていくのと同時に、学生も自己評価をしながら、自らの学びをメタ的に理解し、学びと自らを関連づけられる（学びそのものへの興味をもてる）ようになる可能性をもっているのが、協同的学習という場である・・・今回の分科会から、そのような大きな可能性を感じさせてもらった。教員も学生も「楽しんどい」に挑戦したくなるような＜仕掛け＞作りについて、今後とも探究を深めていきたい。

主体性を育む学習方法 ～IBL学習法の展開～

大阪医科大学 看護学部 講師

西蘭 貞子

主体性を育む学習方法 ～IBL学習法の展開～

第18回FDフォーラム
2013.2.24 分科会事例報告
西蘭貞子

本日の内容

- ・社会の要請とIBL学習の導入
- ・IBL学習の実践例

大学生への期待

- ◆自ら学習意欲を喚起すること
- ◆自立して学習する力をつけること
- ◆自らの将来を見通し自己学習力を高めること
- ◆自分の専門分野における基礎基盤を形成し、
応用能力を身につけること

教育の源：変化が学習を生み出している



変化の設定＝教育環境づくり

成人の学習の特徴

- ・主役は学習者本人
- ・学びのシナリオを書くのも学習者本人



学びたいと思った本人が目的と方法を設定する

* だれからも強制されるものではない

対象者が主役

学習行動成立までの支援のpoint

- ・学習者の意思の取り入れ
- ・学習者の経験の活用
- ・レディネスに応じた教育方法・内容の選定
- ・段階的学習プログラム
- ・学習への内的動機づけ
- ・学習者自身の気づきの支援

米国での医学カリキュラムの変遷

- 1765～：徒弟性基盤型
- 1871～：学問分野基盤型：基礎医学の興隆
- 1951～：臓器系統別：知識の膨大化，基礎と臨床の統合，教育の効率化
- 1971～：問題基盤型：自己主導型学習，問題解決能力重視

Papa & Harasym. Acad Med 1999

看護師養成教育の今日的課題 ～実践能力の向上～

- ・現在の焦点は「実践能力」である。
- ・**実践能力とは・・・**
- ・「抱いた疑問から新たな研究課題を発見できる能力」
- ・**必要な教育**
- ・看護の技術教育は体で覚えるといった「訓練」ではなく、**思考をくぐらせて学ぶ「教育」** ⇔ 反画一化
- ・**必要な力**
- ・対象者が固有に抱える千差万別の状況から課題(問題)を見出し解決する力が必要！！

IBLとPBL 看護学と医学

★事例の捉え方

ex) 腰が痛いと夜中にナースコールを押す65歳の男性

看護学	医学
腰痛の仕組みはどうなっているだろう。「動作と痛みの関係はどうか」「痛みの強さはどうして決まってくるのだろう。」⇒……	腰痛の仕組みはどうなっているだろう。「動作と痛みの関係はどうか」「痛みの強さはどうして決まってくるのだろう。」⇒……
痛みの原因をつかむ事も大切であるが、…… ⇒併せて「痛みにもなる睡眠への影響」「痛みの継続による不安感」など、日常生活への影響に目を向けていく	痛みの原因究明を目的としていく

課題は千差万別

学びのピラミッド



Source: National Training Laboratories, Bethel

千差万別の問題を解決するために必要な思考方法 (仮説検証)

- ◆Aさんにとって何が問題になるのだろうか？
→問題の所在を明らかにする
- ◆もしそれが問題ならどうすれば解決するの？
→解決のための試案を明らかにする
- ◆ところで、この方法でAさんの問題は解決するの？
解決試案を推論によって検証する
解決試案を行動によって検証する

問題解決型学習・探究学習

- ◆学習者の「経験」を重視(成人学習)
経験：行為と結果の関係を導き出すこと
- ◆学習者が関心をもった問題に対して仮説をたて、それを検証する活動の繰り返しによって生きた知識と物事を論理的に考える学びかたのスキルを獲得する学習方法

講義とテュートリアル

・講義

- ▶ 伝授
- ▶ 情報伝達
- ▶ 受動的学習

教員主導型学習
他者決定型

・テュートリアル

- ▶ 自己学習
- ▶ 情報探索
- ▶ 能動的学習

学習者主導型
自己決定型



テュートリアルにおける中核

1. 科目別を廃した統合、さまざまな背景と関連付けられた知識の習得
2. 問題発見能力、情報収集のスキル、臨床推論、課題解決方法のノウハウの修得
3. 自己主導型学習、生涯学習への道筋
4. 対人関係、協調性の修得、コミュニケーションやプレゼンテーション技術の修得
5. 患者への心理、社会、倫理などの多面的なアプローチ
6. 専門家としての態度の養成
7. 将来の状況に直結した学習

テュートリアルの利点

- (1) 事例から抽出した問題を課題として学ぶ自主学习が、単に知識をベースとする従来型の講義よりもはるかに効率がよく、得られた知識がすぐに引き出されやすい。
- (2) 患者を扱うスキルにより得られた知識が、記憶による知識よりも、問題解決型の知識になる。

Barrows(1980)によると、PBLテュートリアルは2つの仮説に立脚している。

IBLテュートリアル

IBL (Inquiry-based Learning, 問題発見探究型学習)

臨床現場では、数少ない不確かな情報から問題設定(仮説設定)を行い、問題解決(仮説の論証と課題仮説の解決)をはかることが求められている。

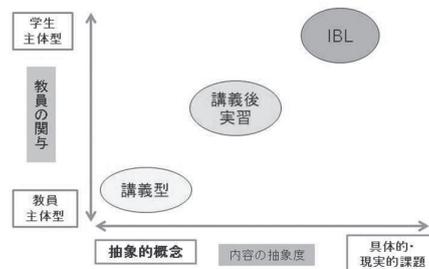
↓
教員による課題提示によって、問題発見の視野が狭まることを回避する工夫。

↓
数少ない不確かな情報から問題発見(仮説設定)を行う力をやしなう学習方法

IBLの基本原則

- ◆ グループを適切に形成する
- ◆ 学習者に、個人とグループワークでの責任を持つようにする
- ◆ 学習課題はグループ討議によって形成を促進する
- ◆ 学習者には、タイムリーなフィードバックが行われるようにする
- ◆ リアリティのある事例を用いる
- ◆ 少ない情報をグループ討議で膨らませる
- ◆ グループ討議の時間は設定する
- ◆ グループで見出した課題はグループで解決策を考える
- ◆ グループ討議で得られた結果は、他のグループに伝える

授業形態の2つの視点と形態類型



特徴1. IBLにおける学習活動
能動的学習の進行

グループ形成



Inquiry-based Learningにおける
学習活動の4つの思考step

事実	仮説	調べる情報	調べる項目
着目した事実	仮説(事実から思い浮かぶこと)	仮説を明らかにするために調べる情報	学習項目

事例の提示
事例内容はPart①～part③の複数回に分けて検討していく

特徴2. IBLにおける授業形態

事例から考えよう



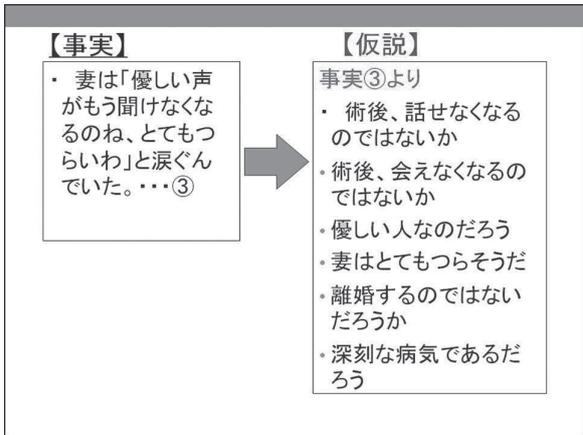
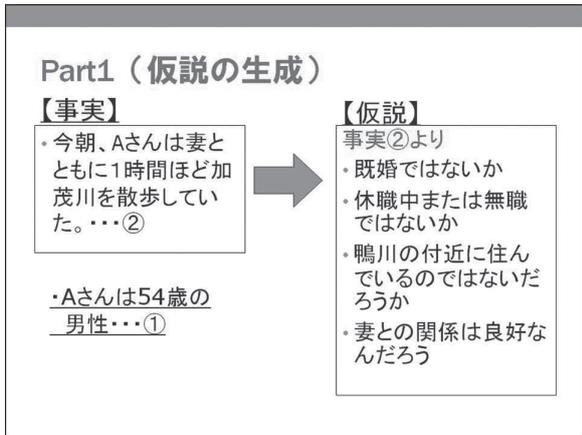
ある事例

- 54歳、男性・・・①
- 妻とともに朝から3時間ほど鴨川を散歩・・・②
- 妻は「あの優しい声をもう聞けなくなるのね、とてもつらいわ」と涙ぐんだ・・・③

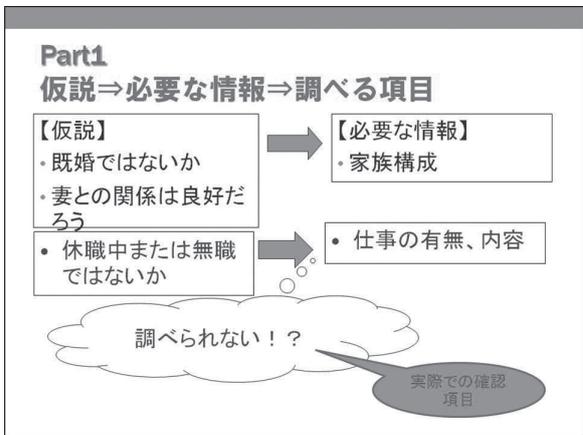
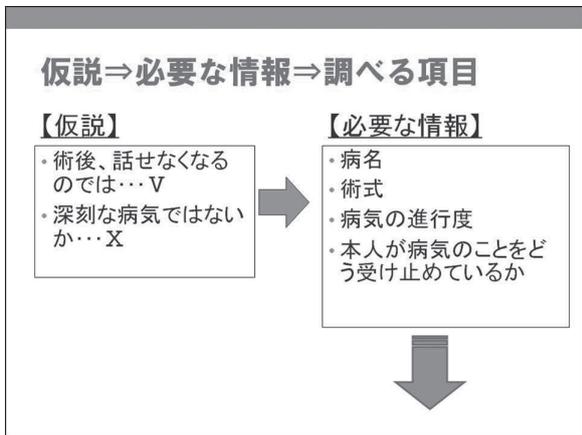
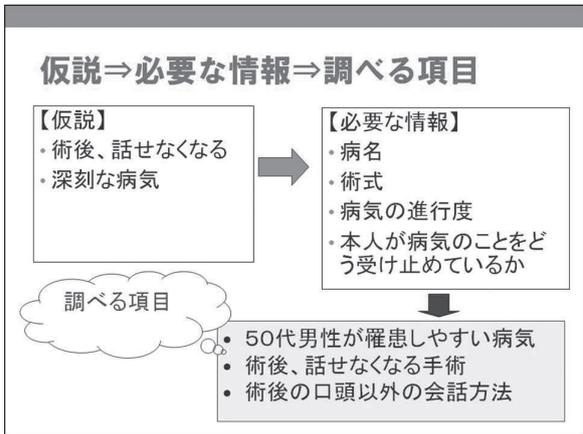
Part1 事実

- Aさんは54歳の男性。・・・①
- 今朝、Aさんは妻とともに1時間ほど加茂川を散歩していた。・・・②
- 妻は「優しい声がもう聞けなくなるのね、とてもつらいわ」と涙ぐんでいた。・・・③

各(①～③)事実から次のように仮説を形成した



- ### Part1の仮説
- ・既婚ではないか… I
 - ・休職中または無職ではないか… II
 - ・鴨川の付近に住んでいるのでは… III
 - ・妻との関係は良好だろう… IV
 - ・術後、話せなくなるのでは… V
 - ・術後、会えなくなるのではないか… VI
 - ・優しい人なのだろう… VII
 - ・妻はとてもつらそうだ… VIII
 - ・離婚するのではないだろうか… IX
 - ・深刻な病気ではないか… X



仮説⇒必要な情報・・・⇒調べる項目

【仮説】

- ・既婚ではないか
・・・I
- ・妻との関係は良好だろう・・・IV
- ・離婚するのではないだろうか・・・IX



【必要な情報】

- ・家族構成
- ・夫婦関係
- ・離婚の原因

- ・休職中または無職ではないか・・・II



- ・仕事の有無、内容

Part2 事実

- ・Aさんは、看護師が訪室すると呼吸練習や床上運動を行っていました・・・1
- ・訪室した看護師に「来月から高校野球の予選大会がはじまる。」と言っていました・・・2
- ・「部の顧問として最近一ヶ月は土日もなかった。喫煙は一日40本以上になってた。」と語りました・・・3



Part1と同様にして、仮説、必要な情報、調べる項目を作成していく・・・

Part3 事実

- ・「喉のかすれはなかなかとれんし、疲れもなかなかとれんことが、1カ月前から気になっていました」・・・①
- ・「手術したら声を失うんですね。とてもショックです」「命は助かるんですね」と医師に繰り返し語っていました・・・②
- ・「手術によって声を失うことはショックです」・・・③
- ・「命は助かるんですね」と繰り返し・・・④



Part1と同様にして、仮説、必要な情報、調べる項目を作成していく・・・

自己学習結果

検証1

- ・喫煙に関係した病気だろうか？

喫煙に関する病気

- ・最近1日40本以上のタバコを吸っていた
- ・1ヶ月前から声のかすれと咽喉の違和感と疲労が気になっていた



喫煙に関する病気として考えられるもの

- ・悪性新生物(食道癌、咽頭癌、肺癌など)
- ・循環器疾患(虚血性心疾患など)
- ・呼吸器疾患(肺気腫、慢性気管支炎など)

喫煙声のかすれと咽喉の違和感

- ・咽頭炎
- ・喉頭炎
- ・咽頭癌
- ・喉頭癌
- ・声帯ポリープ
- ・声帯の神経の麻痺
- ・など

50歳男性が罹患しやすい病気

- ・糖尿病
- ・脳血管障害
- ・虚血性心疾患
- ・悪性新生物
- ・など

・検証結果

喫煙に関係する病気？

- ・喫煙が病気の発生に関連しているとは断定できないが、声のかすれと咽喉の違和感があること、50歳男性であることから考えて、喫煙が病気に影響している可能性は大きいと考えられる

検証2

- ・咽喉の違和感は腫瘍だろうか？

咽喉の違和感が症状として現れる病気

- ・甲状腺腫
- ・咽頭癌
- ・喉頭癌
- ・など

声を失う手術

- ・喉頭癌や下咽頭癌に対する喉頭全摘手術では、術後直接気管で呼吸をするために言語機能は失われる
- ・喉頭全摘手術は進行癌に対して行われる
- ・早期であれば放射線治療や部分切除術をするため、声を失うことはない

・検証結果2

咽喉の違和感は腫瘍？

- ・咽喉の違和感が腫瘍であるとは断定できないが、それが症状として現れる病気や術式を検討すると、この男性の事実と一致することが多い

・……………と検証を続けて行きます。

Inquiry-based Learning における学習の流れ



IBLで獲得する5つのskill

1. 自分自身のバックグラウンドの知識・経験を活用し、問題発見能力を養う。不確実な課題(個別の問題)に取り組む。
2. グループ討議を通してメンバー間の協調性、コミュニケーションの能力を磨く。
3. 具体的な学習課題を見出す力を身につける。
4. 学習内容の発表を通してプレゼンテーション技能を身につける。
5. これまでの全過程を総括することによって、経験を通して得た概念や原理を容易に系統的に把握する力を身につける。

何故、グループチームを作るのか

- ◆ 特定の問題解決に、メンバーの既存の知識とスキルを活用する。ひとりだけの思考では、多面的に捉えられない。
- ◆ 教育においては、グループ活動とメンバーの相互作用で知識とスキルの両方の向上を図る。
- ◆ テームでは個人より難しい問題を解決することが出来る。

効果的なグループ構成の特徴

- ◆適切なサイズ(6~7名)
 - 優秀な人材を含むことが出来るくらいの大きさ
 - 団結が確保出来るくらいのサイズ
- ◆多彩なメンバー構成
 - 多彩な視点は情報収集および情報処理能力をアップする。
 - グループが団結したときは、異種の学習グループの方が同質な学習集団より優れた結果を出す。

何故、事例を用いるのか

体系的知識 ↔ 実践の文脈

実践の文脈による問題解決

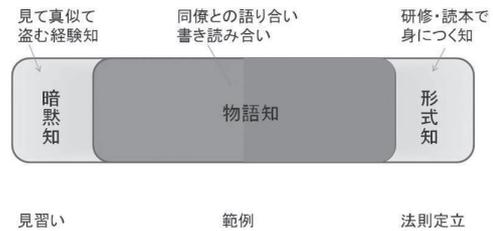
学体系に沿った学習 ↔ 実践に沿った学習

・例) 脳・神経疾患患者の看護

基礎知識	<ul style="list-style-type: none"> 解剖生理 症状と病態生理
疾患の理解	<ul style="list-style-type: none"> 脳疾患 脊髄疾患
看護	<ul style="list-style-type: none"> 症状および障害に対する看護 治療を受ける患者の看護

Aさん 46歳女性。
 一昨日クリッピング手術目的で入院。身長148cm、体重66kg。
 2年前より高血圧を指摘されており、アダラート・プロプレス内服中(内服にて収縮期血圧130~140mmHg)。
 昨日、医師より、術後合併症に関する説明を受け、訪室した看護師に「手術で手足が動かなくなることってあるの？」と何度も尋ねていた。

内在する知とIBL



自律学習の概念

学習者の自律性 (Learner autonomy) とは、

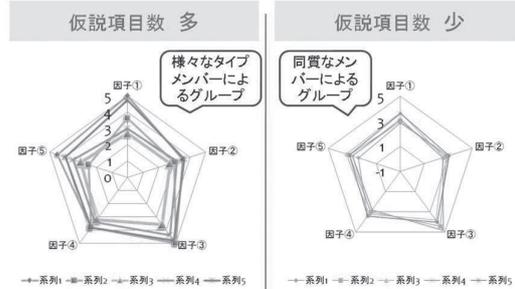
- 「学習者が自分のニーズや希望に役立つように、自分の学習をコントロールするための能力」である。

計画
実施
評価

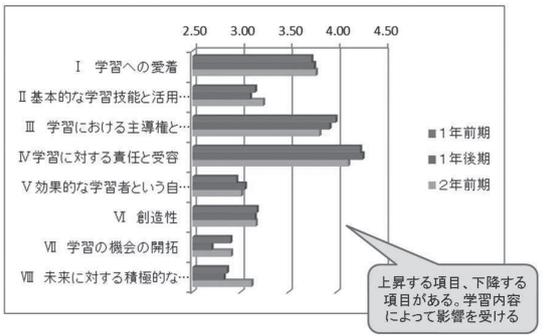
「何を、なぜ、どのように学ぶか」を
 「自分で選んで決めて、プランをたて」
 「実行し、実行した結果を自分自身で評価できる」

学習者の自律性には個人差がある。
 自律性は実際の生活、学習経験を通して養われる

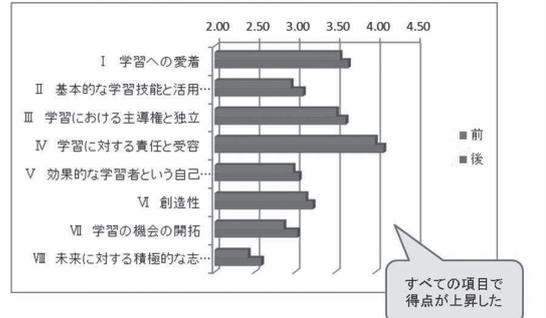
メンバー構成と仮説項目数(A)



学年進行によるSDLRS得点の変化



IBL実施によるSDLRS得点の変化



PBL とチーム学習～プロジェクト科目の場合～

同志社大学 PBL 推進支援センター長 文学部 教授

山田 和人



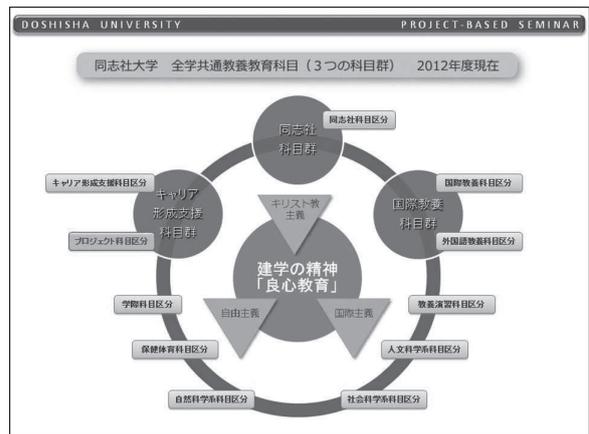
DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

本学におけるPBL（プロジェクト）の展開

2003年9月 ■ローム記念館完成（京田辺キャンパス）
2004年 ■ローム記念館プロジェクト（課外）開設
2004年 ■現代G P「プロジェクト主義教育による人材育成」採択
2004年 ■文学部プロジェクト科目を新設

2006年 ■全学共通教養教育科目の整備・プロジェクト科目（正課）を新設
2006年 ■現代G P「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」採択
★ PBL研究会の発足

2009年 ■プロジェクト科目をキャリア形成支援科目群に再編
2009年 ■大学教育推進プログラム「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育」採択
2009年11月 ■PBL推進支援センター設置
★ PBL推進協議会の発足



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

プロジェクト科目設置の背景

- 課題発見・探究能力の不足
 - ・情報処理能力は高いが問題発見・解決能力が弱い。
 - ・テクニク・ノウハウの修得は長けているが未知・未決の問題を考える能力が弱い。
 - ・総じて、チャート無き事柄を自分で考え抜く力に欠けている。
- 新しい教育/学習への展開 → PBL
 - ・自律的・主体的学習・チーム学習・アクティブな学び
- 往還型地域連携
 - ・「社会の教育力を大学へ」
- 成功（失敗）体験・現場体験＝現場に学ぶ視点
 - ・プロジェクトの現場（グループワーク等）＝社会の縮図

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

PBL (Project-based Learning)の定義

一定期間内に一定の目標を実現するために、自律的・主体的に学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、個人あるいはチームで協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び

<同志社大学 PBL推進支援センターの定義>

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

P B Lの特徴

- 一定の制約がある。
 - 期限や予算、メンバー数、活動日など
- 教員はガイド役
 - 授業をコントロール
- 主役は学生
 - 学びをコントロール←教員は学生が動き出すのを待つ
- 職員は支援
 - 資源をコントロール(教育リソースをコーディネート)
- 展開の多様性 c.f Problem-based Learning (看護・医療・情報系)
 - テーマや対象年次、カリキュラムの位置付けによって異なる
 - 理系・文系、小・中・高校・大学を問わず応用可(モノづくり、発言等)

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

プロジェクト科目の目的

問題発見能力
問題解決能力
の養成

社会で活躍
するための
総合的人間力
陶冶

協働的・集団的プロジェクトの遂行

プロジェクト・リテラシーの養成

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

プロジェクト・リテラシー

プロジェクトの特性についての理解

目的に応じた効果的・効率的な推進方法

課題探求力

課題解決力

表現力

コミュニケーション力

マネジメント力

企画立案力

情報リテラシー

持続力

忍耐力

チームワーク

リーダーシップ

フォロワーシップ

サポーターシップ

省察力

自己管理能力

段取り力

実行力

調査分析力

コンプライアンス

ストレスコントロール

総合的・創造的に運用する能力・モラル(良心)

プロジェクト・リテラシー

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

■2009年度プロジェクト科目所属学部・年度別登録者数(登録中止後)

学部所属学部	2009	2008	2007	2006	2005	2004	合計
神学部			2	1			3
文学部		6	15	24	1		46
社会学部	1	10	24	19			54
法学部		7	15	10	1		33
経済学部		10	18	8			36
農学部		9	24	13	1	1	48
工学部		12	7	4			23
文化情報学部			1	2			3
工学部-理工学部		17	8	24	1		50
生命医科学部		3					3
スポーツ健康科学部		9					9
心理学部							0
合計	1	83	114	105	4	1	308

プロジェクト科目登録者男女別比率

プロジェクト科目登録者学部別比率

プロジェクト科目登録者入学年度別比率

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

■2010年度プロジェクト科目所属学部・年度別登録者数(登録中止後)

学部所属学部	2010	2009	2008	2007	2006	2005	合計
神学部		2	2	3			7
文学部		5	12	9	1		27
社会学部		20	12	7	1		40
法学部		5	12	9	2		28
経済学部		8	8	6	2		24
農学部		10	11	7	2		30
工学部	1	13	4	3			21
文化情報学部		2	1				3
工学部-理工学部		5	7	19	1		32
生命医科学部		1	3				4
スポーツ健康科学部		8	6				14
心理学部							0
合計	1	80	78	63	9	0	231

プロジェクト科目登録者男女別比率

プロジェクト科目登録者学部別比率

プロジェクト科目登録者入学年度別比率

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

■2011年度プロジェクト科目所属学部・年度別登録者数(登録中止後)

学部所属学部	2011	2010	2009	2008	2007	2006	2005	合計
神学部		1	3					4
文学部		6	10	5	1			22
社会学部		8	14	9				31
法学部		6	16	4				26
経済学部		6	9	11	6			32
農学部		1	16	8	7	1		33
工学部		17	9	4				30
文化情報学部		1	2	12	1			16
工学部-理工学部		5	1	16		1		22
生命医科学部		5	3	3				11
スポーツ健康科学部		5	3	3				11
心理学部		2	2	3				7
合計	10	82	83	67	1	1	1	245

プロジェクト科目登録者男女別比率

プロジェクト科目登録者学部別比率

プロジェクト科目登録者入学年度別比率

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

開講年度	登録者数(のべ)	履修中止者数(のべ)	履修中止率 (履修中止者/登録者数)×100
2009	331	24	7.25%
2010	269	33	12.26%
2011	288	35	12.15%

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

同志社大学 プロジェクト科目の特徴

- PBL (Project-based Learning)
- 全学共通教養教育科目
- テーマ・講師を公募
- 少人数制
- 授業運営費
- 5つのフェーズ



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

公募制

■ 募集対象者
 設置趣旨に賛同し、本学専任教員と協力してプロジェクト科目を担当していただける企業、団体、個人。

企業、団体の場合、主たる科目担当者は1名。

※採択された場合、科目担当者1名を嘱託講師として委嘱
 ※同一テーマのプロジェクトは採択は3回が上限

社会の教育力を同志社大学へ!

同志社大学は、社会の教育力を活用し、学生の学びをさらに深め、社会に貢献する人材を育成することを目的として、プロジェクト科目の公募制を導入しています。

■ 募集対象者
 設置趣旨に賛同し、本学専任教員と協力してプロジェクト科目を担当していただける企業、団体、個人。

■ 募集期間
 毎年2月～3月

■ 採択された場合
 採択された場合、科目担当者1名を嘱託講師として委嘱し、授業運営費を補助いたします。

■ 授業運営費
 授業運営費は、採択されたプロジェクト科目ごとに異なります。

■ その他
 プロジェクト科目は、全学共通教養教育科目として設置されます。

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

公募制

■ 公募書類(応募フォーム、履歴書、業績書)

応募フォーム

概要
1000字

履歴書

教育目的

授業計画

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

公募制

■ 審査

- プロジェクト科目検討部会委員及び、教務主任連絡会議委員に依頼
- プロジェクト科目検討部会で採択原案を作成後、教務主任連絡会議(学部・教務主任)で審議
- ・毎年25～30科目を選定

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

公募制

■告知方法
 ※前年度9月中旬より募集（10月上旬に締切）
 ●プレスリリース／新聞広告
 ●ホームページ
 ●商工会議所や自治体等に公募要領を送付
 ●けいはんなメーリングリスト等

■応募者の内訳

	2006	2007	2008	2009	2010	2011
民間企業	28	13	19	12	9	12
自治体		1	0	0	2	2
NPO・NGO			15	13	11	10
教育機関	31	16			1	0
その他団体			5	7	4	4
個人	124	31	42	39	28	44
学内専任教員	4	1	2	4	4	0
合計	187	62	83	75	59	72

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

■専任教員が科目代表者としてバックアップ
 本学専任教員が各プロジェクト科目の科目代表者として、科目運営を代表

■少人数制
 ●5～15名の登録者（最大19名まで）に制限
 ●登録者が5名未満の場合は、休講

■全学共通教養教育科目として開講
 ●キャリア形成支援科目群として設置

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

■登録者は1年次～4年次の学部生
 京田辺校地に通学… 今出川校地に通学…

学部 学年	神	文	社	法	経	商	政	理	文	ス	生	心	G
	社会	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学	学
1年													
2年													
3年													
4年													

■開講期間・単位 ※殆どの学部で、複数履修が可
 ●春学期科目（2単位）
 ●秋学期科目（2単位）
 ●春学期・秋学期連結科目（4単位）

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

■授業運営費を支給
 ●1セメスター、30万円（税込、上限）
 春秋連結科目の場合は、60万円（税込、上限）

●使用範囲
 ・謝礼（ゲスト・スピーカーの謝礼等）
 ・文具雑費
 ・図書費（参考図書等）
 ・印刷製本費（冊子、提言書等）
 ・用品費 etc

●予算管理
 ・原則、科目代表者（本学専任教員）が管理
 ・受講生より、会計担当を選出し、手続きを代行

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

■先行登録科目（予備登録が必要）
 ●登録志願書の提出
 ●登録説明会開催日にプロジェクト毎に選考（面談等の実施）



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

■学期末に成果報告会を公開で開催
 ●春学期…ポスターセッション形式
 ●秋学期…プレゼンテーション形式



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

- TA・SAの支援
 - 各プロジェクトにTAかSAを必ず配置
- 「授業運営の手引き」を作成・配付
 - 授業の進め方、成績評価の方法、留意事項
- 学研災付帯賠償責任保険の加入
 - 学外で実施するプロジェクトの受講生は必ず加入
- 成績評価
 - 連結科目の場合も、春学期、秋学期それぞれで評価（GPA）
- 成果報告書の提出
 - 担当者成果報告書（学期末）提出を義務化
 - 学生成果報告書（年度末、カラー冊子）の作成を義務化

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

- 懇談会（受講生／担当者／TA・SA）の開催

PBLの成果、効果、取り組みの改善点等について懇談
セメスターに各1回（年2回）開催

 - 受講生懇談会
リーダー、副リーダーなど
 - 担当者懇談会
科目代表者、科目担当者
 - TA・SA懇談会
- 情報公開
 - プロジェクト毎にホームページの領域を設定
 - ブログによる発信（受講生に記事提供を依頼）
 - 学内専用掲示板による発信

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

授業運営

- 各種講習会・ワークショップの開催
 - CNS（SNS型学修支援システム）講習会
 - リーダー講習会
 - プロジェクトリテラシー講習会
（ポスターセッション、ポスター製作、チームビルディング等）
 - 会計講習会
- アンケートの実施

取組みの改善の参考資料

 - 受講生アンケート
 - 担当者アンケート
- その他
 - 資料室（ミーティング、作業可）を2室設置
 - 機材貸出（PC、プロジェクタ、ネームホルダー等）
 - 印刷補助（レジメの無料印刷、カラーポスター印刷）



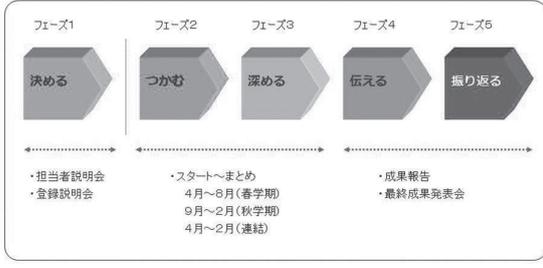

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

従来型科目との違い

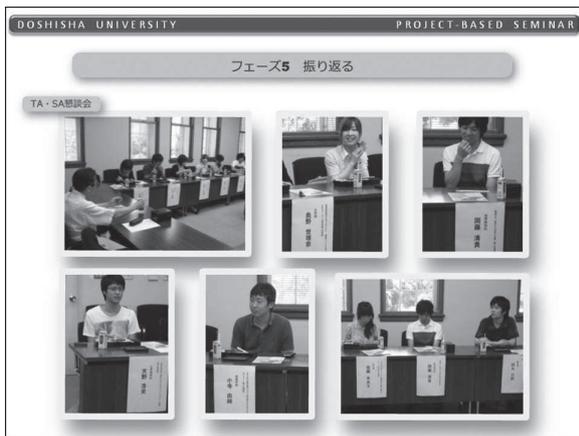
	従来の科目	プロジェクト科目
授業の主役	教員	学生
学生の学ぶ姿勢	受動的→講義型	能動的→企画、提案、体験
教育目的	知識の習得、体系化	知識の統合化、総合化
活動の単位	個人	チーム、グループが中心
地域、社会との関わり	比較的少ない	密接

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

プロジェクト科目の5つのフェーズ



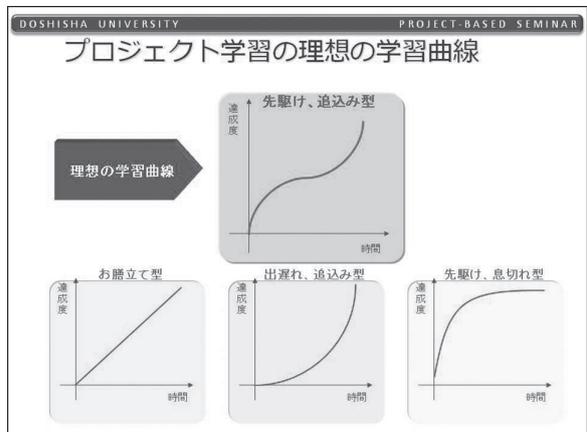
フェーズ	活動
フェーズ1	・担当者説明会 ・登録説明会
フェーズ2	・スタート～まとめ 4月～8月（春学期） 9月～2月（秋学期） 4月～2月（連結）
フェーズ3	
フェーズ4	・成果報告 ・最終成果発表会
フェーズ5	



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

イベントスケジュール 2011年度

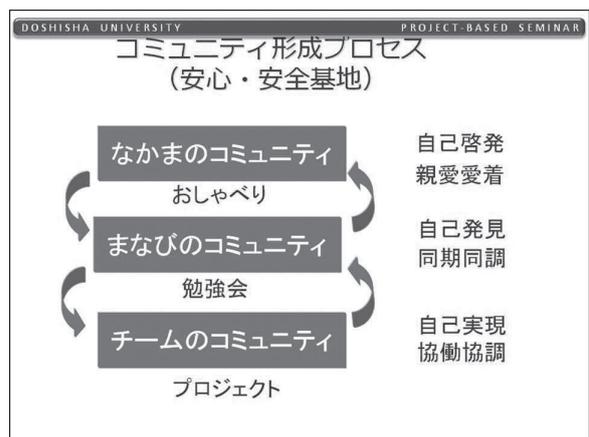
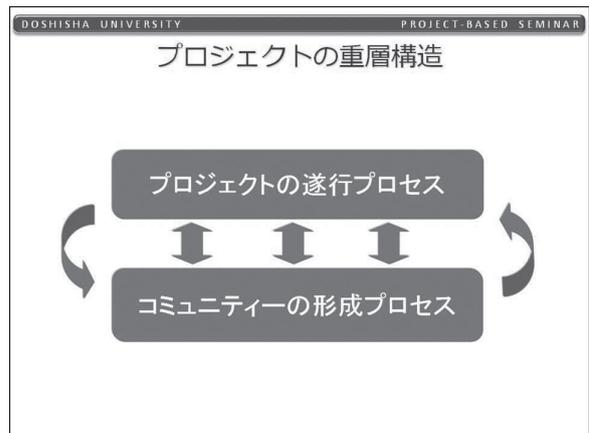
年月	2011年度プロジェクト目標	2012年度公開・発信のスケジュール	2011年度 PBL推進支援化ステップ
2011年3月	3/26 実行委員会開催		
4月	4/7 春学期 授業開始(プロジェクト外活動) 4/27-28 学生 生涯相談会		
6月	6/13 第1回プロジェクトシンポジウム開催 「伝える技術について～ホスピタリティ～」		6/24 大卒層合同結果報告会(東京大学)
7月	7/6 春学期 学生懇談会 7/13 春学期 SA/TA懇談会 7/24 春学期 成果報告会(田辺キャンパス) 7/30 春学期 科目担当者・代表者懇談会		7/22 第1回市民公開説明会(市民公開説明会 「プロジェクトの初～スタート～」)
9月	9/26 秋学期 授業開始(プロジェクト外活動)	9/28-30 2012年度プロジェクト科目 公募説明会	9/17 第1回PBL推進協議会 「PBL推進に向けた担当者の役割と考え方」
10月			10/14 第2回市民公開説明会(市民公開説明会 「プロジェクトの初～スタート～」) 10/22 PBL推進フォーラム2011 「学生が成長を続けるPBL ～実践的学習を学ぶための実践～」
11月			11/12 第2回PBL推進協議会 「地域連携力強化と連携型PBLの可能性と課題」
12月	12/20 第2回プロジェクトシンポジウム開催 「伝える技術について～ホスピタリティ～」	12/10 2012年度プロジェクト科目 科目担当者・代表者懇談会	12/8 第3回市民公開説明会(市民公開説明会 「市民公開説明会」)
2012年1月	1/11 秋学期 学生懇談会 1/18 秋学期 SA/TA懇談会		1/7 第3回PBL推進協議会(東京大学) 「PBL推進に向けた実践～」
1月	1/22 秋学期 成果報告会		
2月			2/18 2011年度シンポジウム 「プロジェクトの初～スタート～」
3月	3/3 秋学期 科目担当者・代表者懇談会		



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

プロジェクトの属性=逆境=プロジェクトの教育力

- 期間が限定されている。
- 目標を明確化する必要がある。
- 自分たちでスケジュールを決めなければ進まない。
- 手近なマニュアルがない。
- リスクとトラブルがつきものである。
- 大小の問題点の発見と解決を図らなければ進めない。
- 情報共有と時間管理が必要である。
- 社会に発信する行為である。



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

履修の動機

- 学びたい内容だった
- 社会に出て役に立ちそうだから
- みんなとひとつのものをつくりあげたい
- 出会いがありそうだから
- 自由に思うようにできそうだから
- 今まで学んだ知識が通用するか試したい

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

履修後の感想

- 自分の力だけでは勉強できないことが学べた
- 実際、社会に出たときに役に立つ情報や知識を得られた
- 自分の足で調査することの楽しさを知った
- 視野を広げることができた
- 積極性・行動力・コミュニケーション能力・企画力が身に付いた
- 意識の高い学生と共に学び合い、成長できた
- 自分の考えが反省されるのが良かった
- チームで何かを成し遂げることの喜びと難しさを学べた
- 専門の必要性がわかった



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 1 株式会社タカラ・トミーとの連携
玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」

タカラトミーから5980円の3Dデジタルカメラ 3D Shot Cam

この3D Shot Camは、タカラトミーが「おもちゃの国」をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。

このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。

このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。このカメラは、おもちゃの国をテーマにした玩具の企画開発を目的として開発された。

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 株式会社おたべとの連携
新京都みやげの創造

同志社大学の講義から選定、学生が開発した新感覚スイーツ「しょうじゅクリーム」

同志社大学の講義から選定、学生が開発した新感覚スイーツ「しょうじゅクリーム」

同志社大学の講義から選定、学生が開発した新感覚スイーツ「しょうじゅクリーム」

同志社大学の講義から選定、学生が開発した新感覚スイーツ「しょうじゅクリーム」

同志社大学の講義から選定、学生が開発した新感覚スイーツ「しょうじゅクリーム」

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 3 丸池藤井 株式会社との連携
私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 6 国土交通省神戸運輸管理部との連携
観光政策の最前線へみなと神戸訪日外客数アッププロジェクトへ(2009)

外国人観光客はインタビュー

外国人観光客はインタビュー

外国人観光客はインタビュー

外国人観光客はインタビュー

外国人観光客はインタビュー

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 7 京都産学地域経営研究会との連携
量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通(2007)

町内ツアープランなど発表

町内ツアープランなど発表

町内ツアープランなど発表

町内ツアープランなど発表

町内ツアープランなど発表



教育機関連携プロジェクト科目の事例

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 同志社小学校との連携
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 同志社小学校との連携
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)

とけた釜と穿ぬい17
釜にかけるといい
釜師 (釜づくりの職人さん)
大西 清右衛門さん

釜をつくり続ける400年
大西家の歴史をズームアップ!

「釜づくりでむずかしいのは、
初心を忘れないこと」

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 同志社小学校との連携
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)

釜をつくり続けて400年
大西家の歴史をズームアップ!

「釜づくりでむずかしいのは、
初心を忘れないこと」

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 同志社小学校との連携
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)

京都にあるたくさんの伝統産業

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 同志社小学校との連携
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)

京都職場図鑑 発見クラブ

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 同志社小学校との連携
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

Case 2 同志社小学校との連携
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)



DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

PBLとチーム学習

- 学生自らが創りあげていく授業
学生が動かないと始まらない→自律性・主体性が育まれる
- 教員は教えず、見守る指導者
学生に悩むチャンスを与える→信頼・期待で学生は育つ
- 一人ひとりがチームのタスクを引き受ける
役に立っているという実感→責任感
- 多様な異年齢・異組織集団との関わり
多様な価値観との出会い→自己認識を深める
- 適度な競争原理 (切磋琢磨)
他のプロジェクトより、良い結果を出したい
- 学生同士の学び合い (学びのコミュニティ) ※教職員も学ぶ
上級生⇔下級生の相互の学び (相互認識・相互理解・相互批判)

64

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

PBLとチーム学習

- 失敗から学ぶ
失敗から学べるゆとりを→中間発表・最終発表→智恵を絞る楽しさ
- 発表の場と振り返りの場の提供
学びの再構築によりさらに成長→成長の実感と評価される喜び
- デジタルレポートフォリオ (活動の共有財産化)
議事録・報告書・活動記録・コメントなど、日常的な自己評価・相互評価
- プロジェクトを通して学び方を学ぶ
「知識・技法・態度」→プロジェクト・リテラシー教育
- 少人数制
親愛と信頼による安心・安全のネットワーク・セーフティネット

65

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

PBLとチーム学習

- 提供すべきは、愛着を持てる鮮度のいい教材
公募制による多様なテーマの提示
- リアルな現場ではなく、教育環境としての現場
- 課題発見・解決力を自ら磨く (難題に取り組む)
現場で考え、判断することが求められる
- 社会性の獲得 (自己満足に終わらせない)
- TA・SAとの連携による学習支援体制
TA・SA協議会の設置
- 教職学 (教員・職員・学生) 連携の運営体制
科目担当者・科目代表者・受講生・事務局・検討部会委員など
生きたFD・SDの現場

66

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

付論 評価観の見直し

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

評価観の見直し

- 評価主体は誰か？
- 学生同士の自己評価＝チームの相互評価
- コミットメント相対評価！
- プロセスとアウトプットのバランス評価！
- プロジェクトには評価＝振り返りという教育プロセスが内在している。

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

同志社小学校との連携 小学生のための能楽入門プログラムの研究と開発

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

同志社小学校との連携 小学生のための能楽入門プログラムの研究と開発

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

同志社小学校との連携 小学生のための能楽入門プログラムの研究と開発

成果	春秋二回のワークショップ(企画・演出・調査)	
本物教育	児童の体験学習	児童の観察・洞察力
	展示ブース	紙芝居・装束・能面
	体験ブース	能楽師・太鼓方
教育機会の創出	授業との連携	ポスター・DVD
	家庭学習との連携	配布プリント
小大連携プロジェクト	企画会議	授業参観

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

同志社小学校との連携 小学生のための能楽入門プログラムの研究と開発)

評価の視点と方法	→	自己評価の精度の向上(自己評価=他者評価)
学生成績会誌	→	自己評価表
ポートフォリオ	→	活動記録 議事録 企画書 各種報告書
成果物	→	春・秋ワークショップ
第三者評価	→	春・秋成果報告会
		初等教育の専門家評価(佛教大学教員) 協力者評価(能楽師・担任教諭・主任教諭)
動的観察(授業・現場)	→	学生の行動観察
動的観察(ビデオ記録)	→	毎回の授業ビデオ映像



PBL推進支援センターの活動

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

P B L 推進支援センター

■ PBL推進協議会による研究会の開催

- 年5回の開催 2011
- 事例報告を中心とした教育・研究活動
- 小・中学校、高等学校、大学など教育機関を問わず、参加可
- メンバー 71名(事務局含む)

東京電機大学、専修大学、甲南大学、法政大学、広島大学、
 京都文教大学、京都光華女子大学、三重大学、仏教大学、
 山口大学、大阪産業大学、九州大学、大阪大学他 19大学
 同志社小学校、大阪桐蔭中学校高等学校からも参加

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

P B L 推進支援センター

■ 市民公開型教職員協同講習会の開催

- 年4回の開催 2011

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

P B L 推進支援センター

■ シンポジウムの開催

- 年2回の開催 2011

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

P B L 推進支援センター

■ 大学間合同成果報告会の開催(2009~2011)

- 年1回
- 学生がプロジェクトの成果をプレゼンテーション
- 参加大学(2010~は4大学) 東京電機大学、専修大学、法政大学、同志社大学

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

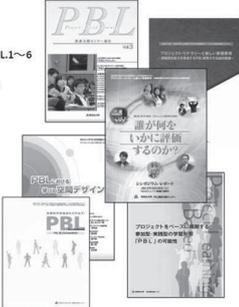
プロジェクト科目関連 刊行物

- ・公募パンフレット 2009 2010 2011
- ・プロジェクト科目シラバス 2009 2010 2011
- ・科目担当者報告書 2009 2010 2011
- ・学生成果報告書 2009 2010 2011

DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

PBL推進支援センター関連 刊行物

- ・PBL推進支援センター通信 VOL.1~6
- ・シンポジウム報告書 2009 2010 2011
- ・ブックレット 2010 2011
- ・PBLガイドブック 2011
- ・教育GPパンフレット 2009
- ・教育GP取組報告書 2011

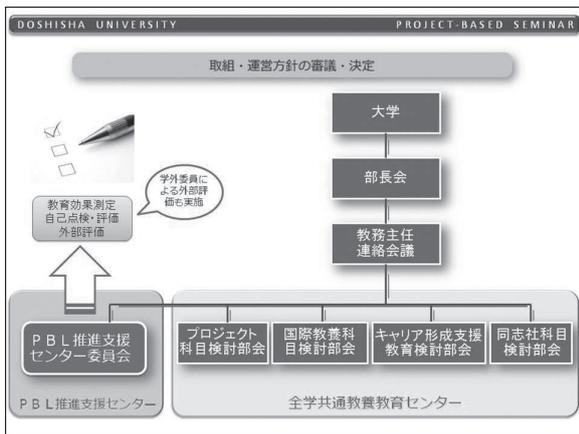


DOSHISHA UNIVERSITY PROJECT-BASED SEMINAR

P B L推進支援センター

■外部評価委員会の開催 2011

- 京都市長/門川 大作 氏
- 社団法人 京都経済同友会 代表幹事/田辺 親男 氏
- 東京電機大学 情報環境学部 教授/中村 尚五 氏



協同学習による授業 — LTD話し合い学習を中心に—

神戸女学院大学 文学部 教授

古庄 高

2012年度 第18回 FDフォーラム 第7分科会
2013. 2. 24

協同学習による授業

—LTD話し合い学習を中心に—

於:立命館大学衣笠キャンパス
神戸女学院大学 古庄 高

1

発表の内容

- ※ 協同学習とは
 - ☆定義と特徴
 - ☆基本的な技法と手順
 - ☆いくつかの留意点
- ※ LTD話し合い学習法
 - ☆LTD話し合い学習法とは
 - ☆実践報告

2

発表の目標

- ※ 協同学習の考え方と進め方を知る
- ※ 協同学習の進め方を体験し、自分の授業づくりに活かす
- ※ LTD話し合い学習法を知る
- ※ LTD話し合い学習法の実践例を学ぶ

3

ミラーリングで自己紹介

目的:グループの全員の名前(姓と名)を覚える
(グループ全員の名前を覚えることはグループ活動の基本)

1. 4人ずつのグループに分かれる
2. 自己紹介の内容: ①名前(名前の由来、漢字)
②所属
③今週あったちょっといい話
3. 自己紹介

4

「ミラーリングで自己紹介」の手順

1. 自己紹介の内容を考える(個人思考)
2. 自己紹介
 - * Aさんの自己紹介
 - * BさんによるAさんの自己紹介のミラーリング(述べ直す)
 - * (AさんのOKをもらった後)Bさんが自己紹介をする
 - * Cさん、Dさん…と、続ける
 - * 全員が終了したら、一人ひとり名前を言えるか確認する
3. グループで話し合い

5

傾聴とミラーリング

傾聴のスキル

- * 話し合いのもっとも大切な基本スキルが傾聴
- * 誰かが話しているときには、他のメンバーは集中して聴く
- * 聴き方によって、話し手の話す内容や話し方が異なってくる
- * 話し手の方を向き、うなずいたり、相づちを打ちながら聴く

ミラーリング

- * ミラーリングも効果的な話し合いのスキル
- * ミラーリングすることで、話し手の発言内容をしっかり聞き、正しく理解したうえで、自分が発言していることが伝わる

6

協同学習の定義と特徴

定義：日本協同教育学会（JASCE）の定義

以下の4条件を満たすグループ学習を「協同学習」と呼ぶ

- * 互恵的な協力関係が成立している
- * 学習集団の目標と活動に対する個人の責任が明確である
- * 生産的相互交流が促進されている
- * 「協同」の体験的理解が促進されている

自分自身と仲間の学びを最大にするために、小グループを使って一緒に勉強させる学習指導法
（『先生のためのアイデアブック』8頁）

7

グループ学習と協同学習

* 学生をグループに分け、「協力して取り組みなさい」と言うだけでは、協同学習にはならない

《グループ学習の問題点》

- ◇人任せ
- ◇ただ乗り
- ◇不参加
- ◇支配

グループの生産性を損ない、メンバー間の不公平感を高める

8

協同学習の基本的構成要素

学習グループを効果的なものにするための5つの要素

- * 互恵的な協力関係
- * 個人の役割と責任
- * 活発な（対面しての）相互交流
- * 対人的技能（社会的スキル）
- * グループの改善手続

（ジョンソンほか『学習の輪』から）

9

技法1 シンク＝ペア＝シェア Think-Pair-Share

1. 課題（質問）の提示
2. ペアをつくる
3. まず各自が考える（個人思考）
4. 一方の学生Aが、他方の学生Bに自分の考えを言う
5. 今度は学生Bが、学生Aに自分の考えを伝える
6. ペアで意見交換、あるいは、お互いの考えをもとに2人でひとつの答えを考える
（6の後、2つのペアが一緒になり、グループで話し合ってもよい）
7. いくつかのペアに意見を発表させ、クラス全体でシェアする

10

授業における学生同士の関係

競争的な関係

- * 一部の人がしか目標を達成できない（相対的な評価）

個別的な関係

- * 誰かが目標を達成しても、自分には影響しない

協同的な関係

- * 自分の目標を達成するためには、グループの目標を達成しなければならない（絶対評価）

<勉強は自分一人でやるもの⇒学習は社会的な営み>

11

協同的な雰囲気を作る

1. 多様性を生かしたグループ作り
* 多様な（異質な）メンバーによるグループ作り
2. グループの大きさ
* 4人グループ、5人グループ、（最大人数は6人まで）
3. グループの団結（の方法）
* リラックス、相互尊敬、相互信頼の雰囲気
4. 協同の技能を教える
* 課題に集中、全員で、静かな声で、順番に交替、みんなを勇気づける（『学習の輪』第6章）

12

技法 2 ラウンド=ロビン Round Robin

1. 課題(質問)の提示
*これはブレインストーミングの技法。より多くのアイデアを出すのに有効。順番に全員が。出たアイデアはリストに。
*出たアイデアについて評価、質問、説明などをしない
2. 記録係が必要であれば、記録係を決める
3. 一周したら終了するのか、何度も繰り返すのか、制限時間を設けるのかを伝える
4. 誰から始めるかを指示
5. クラスでシェアする

13

技法3 SUMMER(2人で読み込み)

『先生のためのアイデアブック』112頁

1. Set the mood (雰囲気を作る)
2. Understand by reading latently (黙読して内容理解)
3. Mention key ideas (重要な点を述べる)
4. Monitor (モニターする)
5. Elaborate (内容を広げる)
6. Review (復習する)

*5は、2人で内容について意見交換、話し合い、関連づけ等
*6は、2人で考えをまとめて、文章全体を要約する

14

LTD話し合い学習法

1. LTDとは、Learning Through Discussion の略
=話し合いによる学習
2. 提唱者：W. F. Hill (1962年に出版)
3. 日本への紹介：
安永悟著 『実践・LTD話し合い学習法』
ナカニシヤ出版、2006年

15

LTD学習法の目的と効果

1. LTD学習法の目的
*小グループによる話し合いを通して、参加者一人ひとりの学習と理解を深める
2. LTD学習法の効果=総合的
*学習の基本的なスキル
読む、書く、考える、発表する、コミュニケーション、
*主体的に学ぶ態度や能力
*良好な対人関係を築く

16

LTD学習法の構成

1. 予習
*ミーティングに先立って、学生が一人で学習課題を理解するように努め、「予習ノート」を作成する。
(事前準備、個人思考)
 2. ミーティング
*仲間と話し合いながら学ぶ。(集団思考)
- 学習課題(領域は不問、学生の関心、学習目的)
*本の1章、論文、エッセイ、評論、新聞記事など

17

LTD過程プラン(予習用)

導入	St.1 課題を読む
理解	St.2 語彙の理解
	St.3 主張の理解
	St.4 話題の理解
関連づけ	St.5 知識の統合
	St.6 知識の適用
評価準備	St.7 課題の評価
	St.8 リハーサル

*過程プランがあるので、予習ノートは作成しやすい

18

LTD過程プラン(ミーティング用)

導入	St.1 雰囲気づくり	(3分)
理解	St.2 語彙の理解	(3分)
	St.3 主張の理解	(6分)
	St.4 話題の理解	(12分)
関連づけ	St.5 知識の統合	(15分)
	St.6 知識の適用	(12分)
評価	St.7 課題の評価	(3分)
	St.8 ふりかえり	(6分)
		合計60分

授業の進め方

1. LTD記録紙の配布
2. LTD記録紙の「事前調査」の項目を記入
3. ミーティング 60分
4. LTD記録紙の「事後調査」の項目を記入
5. 記録紙の回収
6. 予習ノートの回収
7. 前の週の予習ノートの返却
8. 次週の学習課題の配布
9. その他

LTD記録紙

事前調査の項目

予習に用いた時間 事前準備ができている()
 課題に興味を持っている() 課題の内容を理解できている()
 ミーティングに参加したい() 私は貢献できると思う()
 グループ全体として、各ステップをうまく行けると思う()

事後調査の項目

各ステップをうまく行うことができた() 課題の理解が深まった()
 課題への興味が高まった() LTDをまたやってみたい()
 このグループでまたミーティングを行いたい() ()内は0~100点で
 *自分およびグループの仲間の貢献度を評価
 *授業の評価(大変楽しい、楽しい、ふつう、楽しくない、全然楽しくない)
 *ミーティングについての意見や感想、質問など

これまでのLTDの実践

1. 2010年度、前期:「文献ゼミ」(学科内で研究報告)
2年生23名の授業で、初めてLTDを用いて10回行う。
2. 2010年度、後期:「基礎ゼミ」(さまざまな学習課題)
3. 2011年度、前期:「基礎ゼミ」(初年次教育学会で報告、日経)
4. 2011年度、後期:「文献ゼミ」(『脳む力』人を動かす)
5. 2012年度、前期:「文献ゼミ」「専攻ゼミⅠ」(アドラー心理学)
6. 2012年度、後期:「基礎ゼミ」「専攻ゼミⅠ」「人生論入門」
今年度後期は3科目の授業でLTDを用いている。「専攻ゼミⅠ」は短縮版LTDを用いている。「人生論入門」は学習課題を工夫している。

LTDの授業の効果と課題

*話し合いは楽しい(高い授業評価)
 ・クラスやグループの雰囲気がよい(遅刻や欠席の減少)
 ・回を重ねると話も弾む、仲間との交流の深まり⇒相互尊敬、相互信頼
 ・今の学生たちは話し合いの経験が少ないのか?
 ・リーダーシップをとる学生がいると話し合いがスムーズ(役割は固定しない)
 ・たまに馴染めない学生もいる(話すのが苦手、積極的に参加できない)

*予習もする

・学生によって予習に差がある
 ・手書きの学生もいる
 ・過程プランに沿って書くので書きやすい
 ・専攻ゼミでは学習課題に出てくる理論や人物について調べてくる学生も
 ・予習とミーティングで自分の成長を実感できる

参考文献

1. 安永悟『実践・LTD話し合い学習法』ナカニシヤ出版 2006
2. ジェイコブス他、関田(監訳)『先生のためのアイディアブック』ナカニシヤ出版 2005
3. ジョンソン他、石田・梅原(訳)『学習の輪』二瓶社 2010
4. バークレイ他、安永(監訳)『協同学習の技法』ナカニシヤ出版 2009
5. 安永悟『活動性を高める授業づくり』医学書院 2012